ココロノコエ

人知らず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ココロノコエ

【Ｎコード】
Ｎ８５１８Ｓ

【作者名】
人知らず

【あらすじ】
あなたは心の声を聞けますか？
もし、聞けたらどうしますか？
そんなあなたが運命の出会いをしたら・・・どうしますか？

第一話　スベテノハジマリ

「おはよ～！今日って暑くない？」
＜マジでダルイ～＞

「まだ春なのにこの暑さはホントに反則だよね～」
＜化粧取れるっつーの＞

こんにちは、私の名前は舞月彩乃（まいつき あやの）、赤月高校二年の元気な女の子で～す。
あ、自分で元気っていうのはおかしいかな？
まあ、いいよね！
チャームポイントはクリクリっとした目とツインテールにしてある長くて黒い髪
スリーサイズは・・・・自信ないから紹介無し
特技は人の心の声が聞こえること！
・・・・信じられない？
信じないなら別にいいよ
でも、結構大変なんだよ？
いつも誰かの心の声が聞こえてくるからうるさいし
友達と話してても何考えてるか分かっちゃうし・・・・・・
・・・その・・・彼氏も・・・できないし・・・・・・・・・
いや！出来ないわけじゃないんだよ？・・・ただ・・・出会いが無いだけだもん・・・
・・・・・・・そう・・・出会いが無いだけ・・・・

「はぁ～」

「どうした？朝からため息なんて」

＜どうした？朝からため息なんて＞

「理沙～」

彼女はクラスメイトの佳苗理沙（かなえ りさ）

理沙は思ったことをそのまま口に出すタイプらしくて私でも仲良く出来ている一番の親友なんだ。

「悩みがあるならあたしが聞いてあげるけど？」

＜悩みがあるならあたしが聞いてあげるけど？＞

「ありがとね。別に悩みとかじゃないんだけど・・」

「ないんだけど。彼氏がいない・・・かな？」

＜ないんだけど。彼氏がいない・・・かな？＞

「うっ・・・何で分かったの？」

もしかして理沙も心が読めるの？

「あんたねぇ、いつもいつも同じこと考えてれば誰でもわかるわよ」

＜あんたねぇ、いつもいつも同じこと考えてれば誰でもわかるわよ＞

・・・だよね～

「だって、彼氏がいない高校生活とか字のない小説と同じだよ？」

「それってノートだけどね」

＜それってノートだけどね＞

「そんなツッコミいらないって！・・・でも、ホントに彼氏できないかな？」

そのときだった

「邪魔なんだけど」

「え？」

突然、後ろから声が聞こえた。
振り返るとそこにいたのは見知らぬ男子だった。
呆然としている私だったが間に理沙が入ってきたことで我に返る。

「ちょっと、あんた！いきなり邪魔って失礼じゃない！」
＜ちょっと、あんた！いきなり邪魔って失礼じゃない！＞

「邪魔だから邪魔と言ったんだ。何か悪いか？」

理沙の言葉にもまったく怯まずそして悪びれずに答える答える男子
その目は冷たく暗い
だが、私はあることに気がついた。
いつもなら当たり前のこと
それが彼の場合は・・・・・

「ちょっと！どこ行くのよ！」
＜ちょっと！どこ行くのよ！＞

「遅刻したくないから教室に行くだけだ」

そう言って私達の間を通っていく男子

その背を理沙はずっと睨んでいたが私は一つのことを思っていた。

彼の心の声が・・・・聞こえない

まったく聞こえないわけではないがノイズのような音にかき消されて聞こえない
こんなのは初めてだった。
気がつくと私は彼に声をかけていた。

「あ・・・あの！」

私の言葉に彼は立ち止まってゆっくりと首だけこちらに向けた。

「・・・・何・・・・まだなんか用？」

「え・・・えっと・・・その・・」

呼び止めたはいいがなんと言えばいいか分からない
だが、私は考えるよりも早く答えていた

「な・・・名前、教えてくれませんか！？」

なぜか緊張して声が裏返ってしまった。
ちょっと舌もかんだ。
彼は私の問いに答えず再び校舎の方へ向きなおし、歩いていく
いつもなら心の声が聞こえるから名前を知るのなんて簡単なんだけど・・・・
彼が校舎に入る直前、立ち止まってこちらを向いた。

「・・・・・麻川灯夜（あさがわ とうや）」

短く、それだけ言うと校舎へと入っていった。
隣ではまだ理沙が睨み続けていたがそれに気づくことは出来ない。
私の頭の中は彼のことでいっぱいになっていたんだから

・・・・・・私・・・出会っちゃったかも

第一話　スベテノハジマリ（後書き）

どうも！人知らずです。
今回の話の舞台もコンパスなどと同じ赤月高校なんですが、今回のテーマはピュアな恋愛を目指しています。
まあ、彼女のいない作者にかけるかどうかは分かりませんが・・・・・
とにかく、がんばっていきますので応援よろしくお願いします！

第二話　コレハデアイ？

いつも通りに全ての授業が終わり、放課後になると新一年生の勧誘が始まる。
文化部、運動部のどちらも大きな声を上げて勧誘活動をしている。
私からすればたくさんの心の声がうるさくて仕方ないんだけど、聞こえなくても普通の声だけでもかなりうるさいと思う。
たくさんの人が一つの塊のようになっている中、彼の周りだけはなぜか誰もおらず、勧誘もされていない。
怖がっているわけじゃないと思うけど、何でだろ？
まあ、話しかけるのには好都合だけど
人の渋滞の中を何とか通って彼に近づいていく
何とか通り抜けて彼の姿を探すが彼の姿はない

「はぁ～やっぱり運命とかじゃないのかな？」

「運命とか夢見すぎだろ」

「そうかな？女の子なら運命とか信じてもいいと思うんだけど」

・・・・・あれ？私、誰と話してるんだろう？
声の方へ振り返ると朝と同じように彼は立っていた。

「な、何で！？」

「俺がここにいちゃいけませんか？せ・ん・ぱ・い」

「え？」

先輩？
彼・・・麻川くんの制服を見るとネクタイの色から彼が一年であることが分かった。
なるほど、だから会ったことなかったんだ。
「あ・・・麻川くん・・・奇遇だね」
「何か使い方間違ってません？ていうか偶然じゃなくて先輩が俺を探してたんじゃないですか？」
「そ・・そんなこと」
「・・・・嘘下手すぎ」
「うっ・・・・で、でも、麻川くんだって私に会いに来たじゃん」
「会いに来たんじゃなくて、聞きに来たんです」
聞きに来た？
何のことか分かっていない私に構わず話は続く
「先輩って・・・・心の声が聞こえるんでしょ？」
「・・・・・誰から聞いたの？」
「誰に聞いても知ってますよ。先輩は有名人ですから」
「・・・・麻川くんは私と話してて平気なの？」
「・・・・はぁ？」

「だって・・気味悪くない？思ってること全部聞かれちゃうんだよ？嘘ついてもすぐにばれるし、隠し事だって出来ないんだよ？そんなの嫌じゃないの？」

何でいきなりこんなことを言ったのか分からない
突然こんなことといわれてもわけ分かんないはずなのに
今までこんなことなかった。
誰かを必死に探すことも
誰かにいきなり悩みを言うことも
言った後で不安になることも
やっぱり・・・・・気になるからかな？

「先輩、俺の聞きたいことってまさにそれなんですけど」

「・・・・・え？」

「俺って今、何考えてます？何をしたいって思ってます？」

「な、何言って・・・」

「俺、自分の思ってることが分からないんですよ。だから先輩なら分かるかな？って思ったんですけど・・・・・駄目みたいですね」

彼の話を聞いて私の中で一つの考えが浮かんだ。
彼の声が聞こえない理由
それは・・・・彼自身が自分の心を聞けていないからかもしれない
人の心の声まで聞ける私と自分の心の声すら聞けない彼
正反対のようで意外と似ている。
そんな彼だからこそ私は惹かれたのかもしれない

「・・・・ごめん」

「謝らないでくださいよ。・・・しょうがないことなんで」

「・・・・敬語・・・止めてもいいよ」

「謝罪のつもり？」

「ううん、唯、よそよそしくて嫌いなだけ」

「なら止める」

敬語を止めた瞬間に彼の周りの空気が変わった気がした。
なんていうか・・・・冷たい感じ

「・・・・あんたの名前は？俺が言ったんだからあんたも言えよ」

「急に態度が変わったね。まあいいけど・・・・私は舞月彩乃」

「・・・・漫画みたいな名前だな」

「別にいいじゃん、かわいいし」

自分的には気にいってるんだけどな

「まあいいか・・・・ほい」

「え？・・・・何これ？」

彼の投げてきたのは丸まった紙
そこにはいくつかの数字とアルファベット・・・・これって・・・・・・

「俺のメルアド、基本的に暇だから」

「な、なんで？」

「特に理由はないけど・・・・気に入ったからかな？」

「気に入った・・・・・」

「心配しなくても深い理由はねぇよ。じゃあな」

そう言って去っていく麻川くん
彼は気づいてないんだろうな
この短い間に私の顔が赤くなっていたことも心臓の音がうるさいことも・・・・
すぐにでも連絡してどこかに行きたいこの気持ちも

第二話　コレハデアイ？（後書き）

・・・・・ピュアって何なんですかね？
難しい・・・・・

ご意見・ご感想お待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8518s/

ココロノコエ

2011年10月8日10時18分発行